

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月13日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21530938

研究課題名（和文） 中等国語科における論証を軸とした表現・理解力の学習と発達に関する
実証・実践的研究研究課題名（英文） Learning and Development of Argumentative Text Writing and Reading
in Secondary School Japanese Curriculum

研究代表者

間瀬 茂夫 (MASE SHIGEO)

広島大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：90274274

研究成果の概要（和文）：本研究では、中学校、高校の説明的文章の読みの授業における論証の理解と表現の関連指導に関する研究を行った。中学生は、筆者の推論に対して批判的になる一方、暗黙の前提を補って理解し表現することは難しいことが明らかになった。また、先駆的な授業の観察・分析を通して、論証を扱う授業モデルを次の4つに類型化し、有効性を確かめた。A生活世界における理解・表現の授業、B説明的文章の推論的理解・表現の授業、C説明的文章のクリティカルな理解・表現の授業、Dカリキュラム展開による理解・表現の授業実践。

研究成果の概要（英文）：We studied about the instructional models of argument in reading comprehension connected with writing and small group discussion. We have four instructional models to teach argument in secondary school Japanese classes. In type A, students learn argument in the context of school life. In type B, they learn it in inference reading of expository texts. In type C, they learn it in critical reading of expository texts. In type D, they learn it in multiple contexts of reading curriculum.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：説明的文章 文章理解 論証 授業モデル 協同的過程

1. 研究開始当初の背景

中等国語科教育において、文字言語あるいは音声言語によって、論理的に理解し、表現する能力を育成することは重要な教育課題である。しかし、我が国の中等教育段階の母語教育では、表現能力と理解能力とを切断し、後者とくに読解に終始した教育を支配的に行ってきた。その結果、言語による表現と理解をリテラシーとい

う概念によって統合的にとらえる学力観を基盤とする国際的な学力調査（PISAの調査等）において、芳しくない結果に甘んじることとなっている。

戦後教育において学習指導要領や教師の心性に深く根を下ろした、「正確に理解する」すなわち文章に明示的に書かれている情報をそのまま再生することを学力と見なす信念（国語学力モ

デル)が、教師の授業実践を規定し、ひいては学習者の身につける国語学力を制限することになっている。こうした問題の把握から導かれる本研究の全体的な目的は、表現と理解との関連型国語学力および授業モデルを構築し、教師の持つモデルを更新することで授業改善を実現し、学習者に関連型国語学力を形成することである。

本研究では、中等教育段階における国語科の授業において、言語による理解力と表現力とを関連づける要因として論証を位置づけたが、加えて我々のこれまでの二つの研究文脈との接続を計っている。一つは、論理的文章の読みの能力および小集団における話し合い能力の発達の過程をとらえる研究との接続である。もう一つは、授業のあり方とそこで学習者に身につけられる学力を規定する教師が意識的あるいは無意識的に持つ学力観を問う研究との接続である。

2. 研究の目的

本研究は、中等教育段階を対象とし、学習者への実態調査と先駆的な授業実践の授業観察を通して、表現と理解の能力関連を計る関連型国語学力および授業モデルを構築し、学習者の学力形成と教師の授業改善に対するモデルの有効性を検証することを全体の目的とする。具体的には、次の3つの研究課題を明らかにする。

- 1) 学習者の研究…論理的文章の読みにおける論証の理解能力(論証のスキルの側面)と、論理的文章の読みと関連した表現活動における論証の表現能力(論証の状況的側面)の学習と発達の過程を明らかにし、発達をふまえた関連型国語学力モデルを構築する。
- 2) 教師の研究…中学校国語科教師が論証的な理解と表現の能力を国語学力としてどのようにとらえているかについて調査を通して明らかにする。
- 3) 授業モデルの研究…先駆的な実践を行う教師(研究協力者)による授業観察を通して、関連型授業モデルの構築を行う。また、教師への関連型モデルの教授と実験授業を通して、

学習者における学力形成、教師における授業改善という二つの側面からモデルの有効性の検証を行う。

3. 研究の方法

3つの研究課題の解明を行うため、次の手順で研究を進める。

1年次には、これまでのものを含めた学習者に対する調査を通して、学習者の論理的文章の読みにおける論証の理解能力と表現能力の発達の様相を明らかにするとともに、発達をふまえた関連型国語学力モデルを構築する。

2年次には、教師に対する調査を通して、教師が論証の理解を論理的文章の読みの学力としてどのように位置づけているのかを明らかにする。また、研究協力者による先駆的な授業の観察を通して、関連型国語科授業モデルの構築を行う。

3年次には、現職教師への関連型国語学力および授業モデルの教示と授業観察を通して、学習者の学力形成と教師の授業改善の二側面からモデルの有効性を検証する。

4. 研究成果

(1) 学習者における論証の理解・表現能力

論理的文章の読みにおける論証の理解能力と、音声および文字による表現能力の発達の関連を明らかにするという研究課題に対し、研究協力者である宮本浩治教諭(実践時広島大学附属中・高等学校)が行った中学校の各学年における授業を通して、継続的に得た論証理解に関する反応データを得るとともに、分析を行った。

中2:河合雅雄「若者が文化を創造する」(学校図書・中2) 2007年2月

中3:鷲田清一「寂しい時代と聴く力」(学校図書・中3) 2008年6月

中1:手塚治虫「この小さな地球の上で」(三省堂・中1)および安田「モアイは語る」(光村図書・中2) 2009年12月

中1では、多くの学習者が随筆における個人

的な経験の説明と、評論における科学的な説明との違いをとらえていた。しかし、両者におけるアナロジーによる推論の共通性についてはとらえられていなかった。

中2では、筆者の二つの主張を導き出す理由づけの間にある表層的な矛盾について、批判的な理解がなされていた。しかし、表層的な矛盾を統合する真の理由づけについては理解に至っていなかった。

中3では、筆者の述べる根拠から、主張を導く暗黙の理由づけを補う推論について、自己の経験からの推論は行っていたが、文章の枠組みを用いた推論は一部の学習者にしか見られなかった。

以上のように、中1から中3にかけて、筆者の述べる推論(根拠と主張)に、暗黙の前提(理由づけ)が存在することが意識可能になる。しかし、それを学習者が意識的に補い、表現することは難しく、教師による支援が必要である。

(2)国語科教師における論証のとらえ方

中学校、高等学校の現場の教師との対話的調査を通して、説明的文章の論理をどのように理解しているかについて分析を行った。その結果、次のようなことを重視していることがうかがわれた。

- ・明示された主張、根拠について、学習者自身の経験や情報と照らして「疑う」ことを重視している。
- ・主張について、学習者の現実に適合するかということを経験を基準に批判が行われやすい。また、次のような課題も明らかとなった。
- ・推論の導出の妥当性に関する吟味を行わせることが、学習内容や指導目標として十分に位置づけられていない。
- ・「論理」や「推論」について、例えばトゥールミンの議論モデルのような、推論の妥当性の分析方法や基準については知識を習得する機会が必ずしも十分ではない。

(3)授業モデルの構築

論証の理解・表現の関連型授業の授業モデル

を構築するため、連携研究者であるの宮本浩治教諭を含めた3氏による先駆的な説明的文章の読みの授業の観察を行った。

- ・宮本浩治教諭(実践時広島大学附属中・高等学校・現武庫川女子大学)
…前掲 2009年12月 →授業モデルB, C, D
- ・小迫洋子教諭(広島県三原市立宮浦中学校)
…単元「」2011年2月 →授業モデルA
- ・澤口哲弥教諭(三重県立津西高等学校)
…「水の東西」「リアリズムのおけいこ」
2011年6月 →授業モデルC

以上の授業観察から、理解と表現を関連させながら説明的文章の論証を扱う授業について、次のような授業モデルの類型化を行うことができた。

- A 生活世界における論証の理解・表現…日常生活で直面するコミュニケーション上の問題について、論証を用いて理解・表現することで、問題解決することをめざした授業。
- B 説明的文章の読みにおける推論的な論証の理解・表現…説明的文章の論証における暗黙の前提を補って理解し、表現する方向での授業。
- C 説明的文章の読みにおけるクリティカルな論証の理解・表現…説明的文章の批判的吟味に焦点化した授業。
- D 説明的文章の論証の理解・表現のカリキュラム的展開…年間カリキュラムにおいて、BとCを統合的に行う授業実践。

(4)授業モデルの検証

次の授業において、論証モデルと授業モデルの教授を行いながら、授業モデルBを用いて、協同で授業設計を行った。

- 小笠原成章教諭(広島県立広島高等学校)
…「ものことば」「情報流」(高校1年生) 2010年9月～11月

その結果、授業において、学習者は、論証の構造を理解し、暗黙の理由づけを補うための表

現を活発に行なっていた。また、教師も、論証の構造やクリティカル・リーディングの方法について理解を深めるとともに、理解と表現を関連させた指導を行うことについて手応えを持つことができた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 12 件)

- ① 間瀬茂夫, 説明的文章における知識と教材の類型—中学校二年生教材を中心に—, 国語教育論叢, 査読無, 第 21 号, 2012, 43-52
- ② 守田庸一, 説明文の読みの生産性, 語り合う文学教育, 査読無, 第 10 号, 2012, 78-85
- ③ 守田庸一, 「読むこと」の授業における「思考・判断・表現」の学力育成—中学校の説明的文章教材とその学習指導について—, 日本語学, 査読無, 第 30 巻第 10 号, 2011, 28-36
- ④ 間瀬茂夫, 説明的文章の論証理解における推論—協同的な過程における仮説的推論を中心に—, 国語科教育, 査読有, 70, 2011, 76-83
- ⑤ 間瀬茂夫・守田庸一, 小グループによる中学生の話し合い過程の分析—協同的な論証に注目して—, 学校教育実践学研究, 査読無, 17, 2011, 27-37
- ⑥ 守田庸一, PISA 型読解力と説明文指導, 語り合う文学教育, 査読無, 9, 2011, 23-28
- ⑦ 宮本浩治, 授業で問い直す「内なる論理」—授業を通じて語られていくもの—, 国語科教育研究, 査読無, 41, 2011, 56-63
- ⑧ 宮本浩治, 国語科授業研究の課題, 日本語教育レポート, 査読無, 9, 2011, 1-6
- ⑨ 間瀬茂夫, 中学校説明的文章教材における「説明」の階層性と学年段階, 論叢国語教育学, 査読無, 6, 2010, 76-87
- ⑩ 間瀬茂夫, 説明的文章の読みにおける論証理解の協同性, 国語教育研究, 査読無, 51, 2010, 56-65
- ⑪ 間瀬茂夫, 説明的文章の読みにおける「論理」の再検討, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 査読無, 58, 2009, 103-111

- ⑫ 住田勝・守田庸一, 小学生の話し合い能力に関する実践的研究—中学年を対象とした実験授業を通して—, 野地潤家先生卒寿記念論文集, 査読無, 2009, 160-179

[学会発表] (計 3 件)

- ① 間瀬茂夫・宮本浩治・守田庸一, 中学校説明的文章の読みの授業分析—比べ読みにおける話し合い過程を中心に—, 第 119 回全国大学国語教育学会鳴門大会, 2010 年 10 月 31 日, 鳴門教育大学
- ② 間瀬茂夫, 説明的文章の読みにおける論証理解の協同性, 第 50 回広島大学教育学部国語教育学会, 2009 年 8 月 11 日, 広島大学教育学部
- ③ 間瀬茂夫・宮本浩治, 小グループの話し合いにおける説明的文章の推論的読みに関する研究, 第 116 回全国大学国語教育学会, 2009 年 5 月 31 日, 秋田大学教育学部

[図書] (計 4 件)

- ① 宮本浩治他, 学芸図書, 教師を目指す人のための教育方法・技術論, 2012, 250
- ② 宮本浩治他, 学芸図書, 読書で豊かな人間性を育む—児童サービス論—, 2012, 210
- ③ 間瀬茂夫, 守田庸一他, 学芸図書, 新たな時代を拓く中学校・高等学校国語科教育研究, 2010, 294
- ④ 守田庸一他, 溪水社, 文学の授業づくりハンドブック—授業実践史をふまえて— 第 3 巻 小学校・高学年編/単元学習編, 2010, 202

[その他]

ホームページ

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/~sma/se/logos/Research/Research.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

間瀬 茂夫 (MASE SHIGEO)

広島大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：90274274

(2)研究分担者

守田 庸一 (MORITA YOICHI)

三重大学・教育学部・准教授

研究者番号：60325305

宮本 浩治 (MIYAMOTO KOJI)

武庫川女子大学短期大学部・日本語文化学
科・講師

研究者番号：30583207 (H21→H22：連携研
究者)

(3)連携研究者

(4)研究協力者

小迫洋子教諭

広島県三原市立宮浦中学校

澤口哲弥教諭

三重県立津西高等学校

小笠原成章教諭

広島県立広島高等学校